

双方向型の高大連携による地域資源を活かした授業モデルの構築

<研究代表者>

二戸 麻砂彦 山梨県立大学 国際政策学部

<共同研究者>

吉田 均 山梨県立大学 国際政策学部

兼清 慎一 山梨県立大学 国際政策学部

笠井 以友 山梨県立身延高等学校

近藤 学 山梨県立身延高等学校

小林 俊一郎 山梨県教育庁新しい学校づくり推進室

矢ノ下 健司 山梨県教育庁新しい学校づくり推進室

目 次

第1章	はじめに	89
第2章	高校側から見た山梨県立大学との連携講座の成果と課題	90
第3章	大学側から見た山梨県立大学との連携講座の成果と課題	109
第4章	まとめ	110

第1章 はじめに

1 本研究の狙い

本事業は平成26年度から地域研究交流センターの地域研究事業に採択され、初年度は主としてテレビ会議システムの使用や生徒の指導上の課題等を把握する試行を行った。

2年目となる昨年度は、1年目の試行結果を受けて、授業における成果（政策提言）を外部に公表することを具体的な目標として掲げること、授業回数も12回を目処とすること等高大連携の当初の狙いであった「地域振興をテーマに課題を見つけ、解決策を模索する」ことを重視した授業を実施した。その成果は身延町への政策提言、町長へのプレゼンテーションという形で結実し、町からは平成28年度における高大連携事業の実施に要する費用への補助金支出という他にあまり例を見ない形で高い評価を得た。詳細については、1年目の事業実績に関する平成26年度の研究報告書である「双方向型の高大連携による地域資源を活かした授業モデルの構築」^[1]と、2年目の事業実績に関する平成27年度の研究報告書である「双方向型の高大連携による地域資源を活かした授業モデルの構築2」^[2]をそれぞれ参照していただきたい。

3年目を迎える今年度は、現在の授業スタイルが、教員の交替によっても実施ができる持続可能性のあるものか、昨年度までに得た経験やノウハウを基に検証することが目的である。

- [1] 山梨県立大学 地域研究交流センター 2014年度報告書
双方向型の高大連携による地域資源を活かした授業モデルの構築 平成27年3月31日発行
- [2] 山梨県立大学 地域研究交流センター 2015年度報告書
双方向型の高大連携による地域資源を活かした授業モデルの構築2 平成28年3月31日発行

2 今年度の実施内容

今年度は次の内容で実施を計画した。

(1) 授業の題材

先に述べたとおり、地域振興をテーマとして授業を実施するに際し、昨年度は「国際化」と「ユニバーサルデザイン」を切り口に生徒を指導し、考えさせた。これらの切り口は生徒になじみもあり、取りかかりやすいものであった。しかし、いつも同じ題材では生徒の興味を持続させることは難しく、指導する大学側の教員も専門とする分野が違うこともある。そこで、今年度は、新たに「日本語（方言）」と「映像」を題材に取り上げ、昨年度と同様に授業を組み立てることができるか検証することとした。また、昨年と異なり、どのような手法で取り組みを進めたいかという点についても生徒の意見を尊重することとした。

(2) 授業の実施体制

県立大側の教員は、昨年度より1名少ない3名で、高校側の教員は昨年度と同じ

く4名の体制である。生徒は、昨年度と同じく地域振興について興味・関心があるか否かで選抜した者とし、合計15名の参加者が得られた。このうち約1/3は昨年度の授業にも参加した生徒である。これらには今年度初めて参加した生徒に対しリーダーシップを発揮することが期待された。

(3) 授業の実施回数

昨年度と同様、月に1回、第3水曜日の夕方時間外の開催を基本として計画した。大学教員による授業に先立ち、高校側で課題等の確認を行うこと、全体として90分を目処に授業を行うこと、大学見学やフィールドワークといった校外活動を行うことは昨年度と同様である。

第2章 高校側からみた山梨県立大学との連携講座の成果と課題

山梨県立身延高等学校 石川 丈夫

1 平成28年度高大連携授業の概要

(1) 昨年度の反省と今年度の目標

昨年度、二宮浩輔教授、吉田均教授、張兵教授のご協力を得て「ユニバーサルデザイン」と「インバウンド観光」をテーマに掲げ一年間学習、調査、研究を行った。その結果、「心のユニバーサルデザイン」という主題で、「旅行コースの企画」「情報発信」「ユニバーサルデザイン」「防災体制」を基軸とした身延町の観光事業に対し政策提言を行った。これが町長あるいは議会に一定の評価を受け、平成28年度の身延町の観光政策、リーフレットにその意見が取り入れられた。昨年度身延高校・高大連携事業参加者のチーム名である「SKY2017 (Story Kept in You)」の名がリーフレットに刻まれた。高校生が自分たちで考えた政策を町に提言しそれが実際に反映されるという、国内でもあまり例を見ない成果を上げることが出来た。

昨年度の活動を通して、生徒は非常に多くのことを学んだ、身延町のこと、また日本の少子高齢化や地域の過疎化などの日本を取り巻く現状、地域振興のノウハウや実践などの知識面はもちろんである。しかし、さらに重要なのは自ら主体的に学び、働きかける姿勢である。アクティブラーニングの導入が全国各地で進められている一方で、これまでの講義形式での授業を主として受けてきた生徒たちは、まだまだ学びに対して受動的である。しかし、この事業においては、生徒が自ら問題点を見つけそれに対し解決策を自分たちで考えそれを提案・実践していくという、正に今の時代に求められる実践が行われていたのではないかと。今年度も昨年度までの活動の流れを汲み、様々な知識を得る中で生徒の自主性や主体性を育てていくことが出来るような実践を展開していきたい。

(2) 今年度の取り組み

参加者は、昨年より始められた希望者を募ってというスタイルを継承した。昨年度の華々しい成果もあり、1年生5名、2年生2名、3年生1名の新メンバーを加え、合計で

12名（1年次5名、2年次4名、3年次3名）が参加することとなった。県立大学の担当は、兼清慎一先生、二戸麻砂彦先生、サポートに吉田均先生、がついてくださった。

今年度は、昨年度の成果を継承しそれをより具体化していくことを主眼に置いた。昨年度は政策レベルで高校生のアイデアを身延町に提案した。それを受け、今年度は具体的な施策レベルで高校生のアイデアを身延町に提案したいと考えた。政策レベルでの提案を考案する過程で生徒たちは多くを学んだ。しかし、一方で抽象的で概念的な学習に生徒たちの中にその政策が形になった姿、あるいはそれが実現された後の身延町のある姿がイメージされていないことが生徒へのヒアリングで分かった。それを受け今年度は、自分たちが提案した政策の行く末を見守りつつも、自分たちの力で具現化することを目指した。

また、昨年度は大きな成果を残せた一方で、生徒の十分な活動時間を確保することが出来なかったことが大きな課題の一つであった。月一回の活動がベースではあるが、生徒が自ら考え自ら活動するような講座においては、生徒が課題に向き合い試行錯誤し、友人たちと切磋琢磨するのに十分な時間が一定以上必要となる。具体的には、最低週一度くらいは何らかの活動があるようでない、この講座に対する生徒のモチベーションが高く維持できないとともに、生徒の大きな成長は見込めないのではないかと考えた。

さらに、今年度は昨年度設定された枠組みをもとに年度当初から計画的に進め、この事業を永続的にやっていくことが出来るよう、フレームをしっかりと固めることも併せて目標として掲げられた。県立大学も身延高校も職員の配置換えやその年々で業務が変化するために、特定の間人がこの事業に関わりつづけることが非常に難しく、誰にでも担当できるような活動の枠組みを作成することが急務であると考えられた。一方で、生徒の希望や、町の様子、社会の状況で、効果的な内容の選別を毎年行っていかなければならないことも事実である。

2 各講座の実施内容

(1) 第1回 4/18 (月)

a) 授業のテーマ 【オリエンテーション】

この講座の趣旨を理解させると共に、職員及び生徒の自己紹介を通じて参加メンバーについて互いに理解を深め、チームとしての意識を高揚させる。また、昨年度の様子を踏まえ今年度の予定を話し、一年間の活動についてイメージを膨らませる。

b) おおまなか授業の流れ

- ①職員・生徒自己紹介
- ②昨年度の活動紹介
- ③年間行事予定

c) 授業の概況と生徒の様子

本年度身延高校の担当職員及び県立大学の担当の先生を紹介。それぞれの担当教科あ

るいは専門分野の話をしながらか、今年度はどのような活動が展開できるのかを例示し、生徒に今年度の活動をイメージさせる。また、今年度は昨年度よりも生徒の意見をより活動に反映させ、活動時間を増やしていく旨を生徒に伝える。

昨年度から継続の生徒は、昨年度の自分達の成果を元にさらに活動を飛躍させようと大きな希望を抱いて参加してきた。すでにどんなことをしたいかアイデアをもっている生徒もいた。一方、今年度より参加の生徒は、活動に興味津々ではあるもののまだまだ自分たちがこれから何をしていくか見当が付かないという様子であった。昨年度の成果が大きく取り上げられたのを見て、自分たちもそうした活動に参画したいという前向きな思いが見られた。全体としては、この講座の意義を理解し、同じ方向へ向かってこれから進んでいこうという一体感が感じられた。

d) 大学教員のアシスト状況

事前の打ち合わせで、まず昨年度の成果を継承し今後それを飛躍させるのか、それとも心機一転別の方向に進むのか参加生徒の希望をはっきりさせておきたいというご要望をいただいた。

(2) 第2回 4/25 (月)

a) 授業のテーマ 【街の高齢化】

昨年度の二宮先生の講義を参考に超高齢化、過疎化という身延町の置かれた厳しい現状を踏まえ、この問題に高校生として答えを出すこと。そしてその過程で思考力・判断力・表現力を伸張し、身延町の次世代を担う人材、将来を担う人材として育っていくことがこの講座の目的であることを伝える。

b) おおまなか授業の流れ

- ①講義1 「街の高齢化」 講師：近藤 学 (身延高校)
- ②講義2 「身延町の取り組み」 講師：佐野 文昭 (身延町政策室)
- ③討論 司会：近藤 学 (身延高校)

c) 授業の概況と生徒たちの様子

課題としていた、身延町の将来について意見を聞き、それに対しデータから読み取れる身延町の将来像を示す。その後、身延町役場の方が見るこれからの身延町とそれに対する取り組みについて話していただく。それを踏まえて、高校生の自分たちが何が出来るかを考える。

まず、「30年後の地域を考える」という課題に対し、身延高校或いは身延町の将来について、自分の地域のことについてあまり知らなかったり、先のことなどそれほど考えたことはないという生徒が多かった。次に、人口ピラミッドの推移から身延町のこれらの人口の推移について考えさせ身延町の現状について気付かせる。また、そうした状況は日本全国で起こっており、日本全体で取り組んでいかなければならない問題であることに気付かせる。

次に身延町役場政策室の佐野文昭さんより、「身延町まち・ひと・しごと創世人工ビジョン・総合戦略」についてお話しいただく。身延町が超少子高齢化を迎え身延町をどのように復興させていこうとしているのが、どのような未来を描いているのか、具体的に現在どのような取り組みが行われているのかをお話しいただく。

最後に、上記を踏まえ、今年度の一年間で自分たちに何が出来るのかを考えさせる。

d) 大学教員によるアシスト状況

昨年度の二宮先生の講義を参考にし、身延高校職員が講義を行った。



(3) 第3回 5/18 (水)

a) 授業のテーマ 【私たちがつくる新たな物語！】

身延高校OGであり、現在山梨県立大学の佐野光さんを講師に招き、昨年度行った政策提言について振り返り、身延町の抱える問題やそれに対する取り組みを知る。

b) おおまなか授業の流れ

①講義1「昨年度政策提言について」 講師：吉田 均 (山梨県立大学)

②講義2「私たちがつくる新たな物語！」 講師：佐野 ひかる (山梨県立大学)

c) 授業の概況と生徒たちの様子

昨年度身延高校卒業生であり山梨県立大学一年生の佐野ひかるさんに来校いただき講義をしていただいた。佐野さんは、昨年度SKY2015の中心メンバーとして政策提言の作成に大きく関わった。その経験を踏まえ、昨年度の高大連携事業の活動について、政策提言の内容について、また、それに込めた思いについて語っていただいた。

次回までに政策提言の中から自分が興味を持ったところにマーカーを、また、それについて自分の住む街・地域のことを調べてくるという課題が最後に出された。

d) 大学教員へのアシスタント状況

吉田先生、佐野さんに来校いただき講義をしていただいた。大学生として、昨年度の学びをさらに深め、日々様々な活動に取り組んでいる佐野さんの姿は、これから活動をしていく高校生たちに大きな励みとなった。



4) 第4回 6/15 (水)

a) 授業のテーマ 【今年度の事業内容を考える】

政策提言の中から自分の興味・関心が湧いたものをそれぞれ発表し、それぞれの思いや考えを共有する。また、政策提言とそれに対する身延町からの回答を吟味し、そこから今年度の活動を定める。

b) おおまなか授業の流れ

- ①ワークショップ1「政策提言・街の要望・自分たちの希望」
- ②ワークショップ2「身延町の30年後の強み・弱み」

講師：吉田 均 (山梨県立大学)

c) 授業の概況と生徒たちの様子

吉田先生による今年度の活動について意見をまとめるためのワークショップが行われた。付箋を大きな模造紙に張っていく形式で前半では、今の自分にできること、SKY2015による政策提言、それに対する身延町からの回答の3つを比べ、三者の共通項を見つける。ガイドマップの作成という項目では、高校生視点でのガイドマップの作成、交通手段に応じた観光コースの作成という意見が挙がり、町の紹介動画の作成という項目では、身延町の魅力的なスポットの写真や動画を公開し自由に使えるようにする、字幕に対応した動画の作成などが挙げられた。次に、「身延町の強み」について意見を集約し、後半では「10年後の身延町」について考えてアイデアを出した。それを起点に今年度の活動を検討した。次に、まとめた共通項目が10年後の身延町の強みになっているかを検討し、強みとなっているものから今年度の活動を絞っていく。その結果「SNSによる情報発信」と「観光コースづくり」の二つに今年度は取り組んでいきたいという身延高校生の意見はまとまった。この意見をもとに身延高校職員と県立大の先生方で今年度の活動を検討していく。

こうしたワークショップは昨年度同様に生徒にはうけが良く、生徒たちは積極的に取り組んでいた。多くのアイデアが出る中で、他人の意見に疑問を持ったり共感できなかったりする場面もあったが、質問をしたり相手の意見を取り入れようと努力することで、最終的には全員が納得のいく結論が出せた。

また、次回講座にてそれぞれのやりたいことを中心に3グループに分かれ県立大学の先生へ提案を行うこととなった。

①商品開発グループ

身延町に目玉となるお土産を作り、それをきっかけに身延町にたくさんの人に来ていただき身延町の良さをもっと知ってもらう。

②ガイドブックの認知度の向上グループ

身延町には市役所や観光センターなどの作成したすぐれたパンフレットや広告材料がたくさんあるにも関わらず、地元の人も含めその認知度がとても低い。これらの資源をもっと多くの人に見てもために配置や配布の方法を工夫する。

③観光情報の発信グループ

身延町の魅力を紹介するための画像や動画を作成し、インターネット等を通じて広く国内外に発信することでより多くの人に身延のことを知っていただく。

d) 大学教員によるアシスト状況

吉田先生とアシスタントの佐野ひかるさんに来校いただき、二つのワークショップをしていただく。こうしたワークショップは高校現場ではなかなか行わないので、生徒たちにも良い刺激になった。また、高校職員もアイデアだしや、意見の集約など講義の進め方の参考になった。



(5) 第5回 7/23 (木)

a) 授業のテーマ 【今年度の事業案発表会①】

今回は、大学での講義やゼミの体験と施設見学を兼ねて県立大学にて実施させていただいた。大学や学生の様子を直接見ることで大学生活をより明確にイメージし、今後の活動への意欲の向上を図る。また、各グループから大学の先生に向けて今年度の活動についての希望を伝え、今年度の活動を定める。また、今後の活動に活用するようにと、ビッグデータの活用システムである「地域経済分析システム RESAS」を山梨総合研究所の相川喜代弘研究員よりご紹介いただく。

b) おおまなか授業の流れ

①講義1「地域経済分析システム RESAS」

講師：相川 喜代弘（山梨総合研究所）

②事業案発表会

1, 商品開発グループ

発表者：高橋 倫、小林 祥也、丹沢 茉穂

2, ガイドブックの認知度の向上グループ

発表者：野口 和輝、山下 翔、藤田 史歩、藤田 哲平、對馬 琴梨、中山 樹

3, 観光情報の発信グループ

発表者：望月 正之、今村 美優、深沢 圭

③学内施設見学

c) 授業の概況と生徒たちの様子

始めに、山梨総合研究所の相川喜代弘研究員より地域経済分析システムRESASのご紹介をしていただく。それまで見たり聞いた情報でしかなかった身延町への人の往来の様子であるが、RESASを通して身延町の人の流れを実際のデータから知ることができた。こうしたデータは、客観的な数値データとして有効であるだけでなく、その後身延町やその他施設・団体等に提案していく際に非常に有効である。

次に各グループから大学の先生に向けての提案を行った。

①商品開発グループ

よりたくさんの方に身延町に来ていただけるよう、魅力的な商品を開発する。友人や知り合いに意見を聞き取った結果と身延町の観光資源を総合的に考え、西嶋の和紙を用いて方言を活用してデザインしたうちわを作成してはどうか、という提案を行った。

先生方からは、なぜうちわなのか、なぜいろいろある中で西嶋の和紙なのかという鋭い質問が出て、自分たちの考えが安直だったことに気付かされ、まずは自分たちが和紙に触れ、和紙の魅力を体感することから始めなければいけないということに気付かされた。

②ガイドブックの認知度の向上グループ

身延町には優れた観光資源がたくさんあり、それをまずアピールしていくことが大事だということからスタートしたが、すでに優れた広告材料が多くあることを知り、それをより多くの人に見てもらえれば身延町への来訪者が増えるだろうと考えた。そのために、観光客の対象を絞ることとパンフレットの設置場所を再検討することを考えた。また、パンフレットも多言語化や文字の大きさ、言葉の選び方などターゲットに応じてカスタマイズする必要があると考えた。

この提案に対し、具体的にどういった層に絞るのか、どの程度絞るのか、また設置場所はどのような場所が適当かを具体的に考える必要があるのと、公共施設以外は

設置料が発生するなどの問題もあるとコメントを頂いた。

③観光情報の発信グループ

身延町のホームページには、「みのぶでできる 100 のこと」など様々な動画が Youtube 等の動画サイトに挙げられているがいずれも再生回数があまり多くない。アップロードしてまだ間もないということもあるが、視聴するターゲットを想定して、高校生視点での動画を作成してはどうかと考えた。身延町の魅力を時には面白おかしく、時には美しく描くことでより多くの人の心に届く動画作成できるのではないかと考えた。

具体的にどのような動画を作成したいのかが伝わってこないので、実際にいくつか作ってみてはどうかというアドバイスを頂いた。

すべての発表が終わったところで、県立大学の先生より、各グループのアイデアはとても良いが、まだ考えを詰められていないように思える。それぞれもう少し深めてみてはどうかというお話を頂き、次回改めて各グループより提案をすることとなった。

最後に、大学内の施設見学および先生方の研究室と学生の様子を教えていただいた。大学には高校にはない様々な施設・設備があり生徒たちは興味深く見学していた。また、先生方各々の研究室には、沢山の専門書や専門分野の資料が多くあり、生徒たちの目を引いていた。また、日ごろの研究の様子や学生さんの活動の様子も垣間見ることができ、生徒たちは大学生生活に思いを馳せていた。

次回講座での発表に向けて提案の内容を深めるため、各グループが以下のように調査することとなった。

①商品開発グループ

まずは和紙に触れその歴史や製造工程などを調べ和紙の魅力を知ることから始める。次にそれを活かした商品の開発を行う。西島の和紙の里には既に商品化されている様々な和紙製品があったり、製造体験も出来るので、それらを参考に商品を考える。

②ガイドブックの認知度の向上グループ

ガイドブックが現在どこにどの程度配布されているのか、またその効果がどうかをインタビュー或いは、RE S A S など活用して調べる。また、設置場所としてどのような場所が効果的かを検討する。

③観光情報の発信グループ

自分たちがどのような動画を作成したいのかイメージを固める。できれば実際に撮影してみる。また、各地の地方公共団体で作成した広報用の動画があるのでそれらを参考にする。富士川町の町の紹介動画などは一つ参考になるかもしれないとご紹介いただいた。

d) 大学教員によるアシスト状況

RE S A S の紹介では、生徒が普段触れることのないビッグデータの活用法を分かり

やすく解説していただいた。生徒はデータの取り扱いに不慣れであったが手取り足取り教えていただきRESASから様々な情報を得ることが出来た。

また、活動の提案については、大学の先生ならではのご指摘をいただくことが出来た。多少レベルの高い質問に生徒が戸惑うこともあったが、生徒も必死に大学の先生の質問に答えようと努力していた。

(6) 第6回 9/20 (水)

a) 授業のテーマ 【今年度の事業案発表会②】

前回の提案をさらに深め、今年度の活動を定めるための提案を行い、それを元に今年度の活動を決定する。

c) おおまなか授業の流れ

①事業案発表会

1, 商品開発グループ

発表者：高橋 倫、小林 祥也、丹沢 茉穂

2, ガイドブックの認知度の向上グループ

発表者：野口 和輝、山下 翔、藤田 史歩、藤田 哲平、對馬 琴梨、中山 樹

3, 観光情報の発信グループ

発表者：望月 正之、今村 美優、深沢 圭

b) 授業の概況と生徒たちの様子

①商品開発グループ

西島和紙の里を訪れ、様々な体験と販売されている商品について調査した。また、西島の和紙の特徴についても調べた。また、どのようなうちわが欲しいか身延高校全校生徒・職員にアンケートし、そこからのアイデアを参考に以下の商品の作成を提案した。

特 徴：光るうちわ、透明なうちわ、水に濡らせるうちわ、身延有名所うちわ

デザイン：身延の名所、方言、キャラクターなど

②ガイドブックの認知度の向上グループ

ターゲットについては、若い世代に焦点を当てた広告を考えた。若者がスマートフォンで情報を収集することが多いことから、QRコードを活用することとゲーム要素を取り入れてはどうかと考えた。また、設置場所についてはRESASのデータなどを分析したが人が集まるハブの様な場所を見つけるのが難しく、身延の観光地に置いてはどうかと考えた。

若者にガイドマップや観光情報を見ってもらう方法

1, QRコードを活用したスマホゲーム

若者が隙間時間にスマホゲームをしていることから、隙間時間に出来るようなQRコードを活用したスマホゲームを作成し、身延町の観光情報のペ

ージへと繋げる。

- 2, QRコードを活用したおみくじ
身延町の観光情報のページに繋がるQRコードを添付したおみくじを作成し、人の多く集まる久遠寺周辺に設置する。
- 3, 若者向けのホームページ
若者視点の身延町の魅力を発信するホームページを作成する。
- 4, QRコードをモチーフとした切り絵
切り絵の森美術館と協力し、身延町の観光情報のページに繋がるQRコードの切り絵セットを制作する。
※ガイドマップの設置場所は下部温泉などの、身延町内で人の集まる場所などがどうかと考えた。

③観光情報の発信グループ

「みのぶでできる100のこと」に沿って、自分たちの視点で作成してみたが、中々良いものが出来なかった。高校生らしい斬新な視点で動画を作成しなければならぬことに気がついた。突飛なものもあるが以下のような動画を撮影してみてはどうかと考えた。

笑いをとる、チャレンジ系の動画

1. みのぶまんじゅうカレー（カツカレー）
2. 和紙飛行機 No.1 飛ばし大会
3. 下部温泉のお湯 何度まで耐えられるか
4. ゆばバーガー
5. 下部温泉の金を金山博物館の前の川でとるとどれくらいかかる？
6. ゆばラーメン（ゆばを麺状に）
7. みのぶまんじゅう焼き（ステーキ）
8. まんじゅうころりん
9. 流しみのぶまんじゅう

上記の提案を聞いた、県立大学の先生方の印象は、どれもよく調べてあり、どれかに絞ってしまうのはもったいないので、全部進めてはどうか。それぞれの生徒が一番やりたいことをやる方が勉強になるとのことであった。この考えを元に、学校に持ち帰って生徒と検討した。その結果、商品開発は時間とお金がかかり今年度中に形にするのは難しそうだということから、②ガイドブックの認知度の向上グループと③観光情報の発信グループの2つに絞って活動することとなった。

各グループで具体的にどのようなことをするかと、それに対する活動計画を検討。身延高校職員やメールで県立大学の先生方にご相談しながら、次回の講座までにサンプルを作成。

d) 大学教員によるアシスト状況

二戸先生と兼清先生に来校いただき、各々のグループの提案にコメントを頂いた。二戸先生からは、先生の専門である方言の活用について、先生のこれまでの研究成果なども踏まえてご紹介いただいた。方言を取り入れることは、年配の方を視野に入れるのであれば非常に有効であるという助言をいただいた。また、兼清先生からは、動画について助言を頂く。細かな撮影技術や映像の作り方について学ぶのも大事だが、まずは高校生らしい手作り感のある動画を作成するのが良いのではないかと助言をいただく。



(7) 第7回 10/20 (水)

a) 授業のテーマ 【各プロジェクト進捗報告会①】

前回の講義を受けて検討した結果以下のような三つの活動グループに分かれて活動することが決定した。

1, ガイドブックの認知度の向上グループ

- ①おみくじグループ
- ②ゲームグループ

2, 観光情報の発信グループ

- ③動画グループ

今回は各々のグループがこれまでの活動及び現在の進捗状況について報告する。

b) おおまなか授業の流れ

①進捗報告会

1) おみくじグループ

発表者：野口 和輝、山下 翔、藤田 史歩、對馬 琴梨

2) ゲームグループ

発表者：今村 美優、藤田 哲平、中山 樹

3) 動画グループ

発表者：望月 正之、深沢 圭、高橋 倫、小林 祥也、丹沢 茉穂

c) 授業の概況と生徒たちの様子

①ガイドブックの認知度の向上グループ

前回の4つの活動を2つに精選した。理由は、若者向けのホームページはホームペー

ジの作成に関するとところに手間と費用が掛かりすぎるとのこと。QRコードの切り絵は美術館に相談したところ短期間で作成するのは難しいというご意見があったため。その結果以下の二つに集中することとなった。

1, QRコードを活用したおみくじ

身延町といえば代表的な名所である「久遠寺」であり、寺社と言えおみくじという発想から、おみくじで何か身延町をアピールできないかと考えた。おみくじと言えば、一般的に箱の中から紙を引くスタイルだが、生徒が考えたものはポスターに無数のQRコードを散りばめて、その各々のQRコードがおみくじ（大吉、中吉、吉、小吉）となっているものである。また、今回のこのおみくじでは特に、身延町と身延町商工会が力を入れており、身延高校も関わっている「どんぶり街道」のアピールに特化するという事になった。それぞれのどんぶりのバージョンにおみくじの各大吉、中吉、吉、小吉を組み合わせたバリエーションがある。



2, QRコードを活用したスマホゲーム

スマートフォン利用者が増え、またアプリでゲームをする人も老若男女問わず多い。通勤や外食時の待ち時間など手持無沙汰な隙間時間に手軽にできるスマートフォンのアプリがあれば、ゲームを通してより多くの人に身延町のことを知ってもらえるのではないかと考えた。ポスターにQRコードを散りばめ、その中に一つだけ当たりがあり、当たりのQRコードを読み込むと身延町の観光課サイトにアクセスできるという仕組みだ。ハズレのQRコードにも身延町の様々な名所の情報が載っており、ゲームを通して身延町のことをたくさん知ってもらうことが出来る。一方で課題は、当たりがただ身延町の観光課のサイトにつ



なगरだけで良いのかということである。もう少し当たりを引いた時のお得感が無いかというのが今後の課題として指摘された。

②観光情報の発信グループ

設定したテーマの中からいくつかについて動画を作成。狙いは以下の3点

- 1、10代～20代の若者にターゲットを絞る
- 2、15～30秒にまとめ、動画サイトやSNS等を通じて多くの人に見てもらう
- 3、何度も見てもらい、興味を持つだけでなく実際に身延に来てもらえるよう、様々なバージョンの動画を作成する。

サンプルとして以下の動画を作成

1、身延饅頭カレー

身延饅頭をアピールする目的で、身延饅頭をカレーに添えて食べる様子を映した動画を作成。いわゆる食レポのような動画であり奇を衒った動画であるが、中々その味わいを言葉や表情で伝えるのは難しい様であった。高校生が作った手作り感が県立大学の先生方にも好評だった。

2、和紙紙飛行機対決

中富地域の和紙をアピールするため、和紙で作成した紙飛行機を飛ばしその飛距離を争うという動画を作成。高校生らしい奇抜なアイデアではあるが、自分たちのただ撮りたいことを撮っているだけであって、身延町をアピールするという意味では、まだまだ考えが浅はかであった。そこで、身延町の良さをアピールするということを念頭に置いて、以下の2つのテーマで今後は動画を作成していくことを計画した。

1、身延饅頭食べ比べ

身延町といえば誰しも頭に浮かぶ「身延饅頭」をアピールするための動画を作成。身延饅頭を製造・販売している店舗は実は栄昇堂・甘養亭・松屋・さくら製菓の4つあり、それぞれ味わいが違うということはあまり知られていないのでそこに焦点を当てた動画を作成。

2、身延饅頭の四季

同様に身延饅頭について、身延町の名所と組み合わせ、身延町の名所と身延饅頭の両者のアピールが出来るような動画を作成。身延町の各所で身延饅頭を試食している動画を作成。

d) 大学教員によるアシスト状況

兼清先生に来校いただき、各々のグループの提案にコメントを頂いた。いずれのグループも順調に進んでいると好評いただいた。一方でまだまだ詰めていかなければいけないことも多く、沢山の宿題をいただいた。



(8) 第8回 11 / 30 (水)

a) 授業のテーマ 【各プロジェクト進捗報告会②】

各グループがそれぞれの活動内容に応じて、進捗状況を報告。県立大学の先生方に指摘や助言を頂く。

c) おおまなか授業の流れ

①進捗報告会

1、おみくじグループ

発表者：野口 和輝、山下 翔、藤田 史歩、對馬 琴梨

2、ゲームグループ

発表者：今村 美優、藤田 哲平、中山 樹

3、動画グループ

発表者：望月 正之、深沢 圭、高橋 倫、小林 祥也、丹沢 茉穂

b) 授業の概況と生徒たちの様子

①QRコードを活用したおみくじ

おみくじのポスター・ウェブページ用の写真を撮影しポスターを作成。撮影に関して、時間の関係で教員がすべて進めてしまったが、お店への依頼、交渉など今後はこうしたところも、生徒が行っていけると良いと感じた。内容や文言、方言等は事前に県立大学の先生方にご確認いただく。文字の配置や色合い、構図やQRコードを読み取らせるための工夫など細かいところをご指摘いただきながら修正する。また、デザインが固まってきたところでポスターおよびウェブページの作成を進める。今回は時間に余裕がないため、身延高校職員と県立大学の先生方で業者の方々と話を進めたが、いずれはこうしたところも生徒の手で進められるようになるとより良いのではないかと感じた。また、それと合わせてポスターの配置についても、人の動きや設置場所の環境なども考慮しながらより効果的な配置を考えることは今後の課題である。

②QRコードを活用したゲーム

ポスター及びウェブページのデザインを作成。全体的に良くできていると評価いただく。文言やQRコードへの誘導について助言をいただく。もう少し簡単にゴールでき

るようわかりやすく、QRコードの数を減らしたほうが良いと助言をいただく。配置場所については、身延町内に関わらず、広く設置をしたいという希望があり、県立大学の先生の協力を得て、県内の観光客が多く集まる場所をRESASを参考に選び設置することを検討。

③動画グループ

「身延饅頭食べ比べ」と「身延饅頭の四季」というテーマで動画を作成、それぞれ高校生らしさが出ていて良い動画だと評価いただく。一方でまだ細かい作り込みが足りず、県立大学の先生方より指摘を受ける。また、動画作成とともに公開のことも考えていかなければいけないと話題が上がったが、ユーチューブにアップするなり、身延町にアップするなり、いくつか方法があるが、いずれもターゲットと狙いを明確にしなければならない。次回までにさらに動画を撮影するよう助言いただく。



(9) 第9回 1/17 (水)

a) 授業のテーマ 【各プロジェクト進捗報告会③】

各グループがそれぞれの活動内容に応じて、進捗状況を報告。県立大学の先生方に指摘や助言を頂く。

c) おおまなか授業の流れ

①進捗報告会

1、おみくじグループ

発表者：野口 和輝、山下 翔、藤田 史歩、對馬 琴梨

2、ゲームグループ

発表者：今村 美優、藤田 哲平、中山 樹

3、動画グループ

発表者：望月 正之、深沢 圭、高橋 倫、小林 祥也、丹沢 茉穂

b) 授業の概況と生徒たちの様子

①QRコードを活用したおみくじ

年末年始にかけて作成したポスターを久遠寺境内とロープウェイ周辺に設置。アクセス状況を観察したかった。それほど多くではないが年始に観光客がQRコードを読

み込んだ形跡が見られた。決して望ましい結果が得られたわけではないが、実際に自分たちが作成したものを見ず知らずの観光客が楽しんで利用してくれたという満足感や達成感があったようだった。まずは、作成したポスターを掲示し、観光客に利用してもらったという一連の流れが完結できたことは大きな成果であった。また、利用者の居住地を調べてみると首都圏（東京が最大）各地から来ていることが分かった。今回は、Google Analyticというグーグル社のサービスを使用した。近年ではこうした様々なデータを閲覧できたりまた、データ解析のツールがあるため、こうしたデータの活用は今後積極的に活用していく必要があると感じた。

一方で、課題ももちろん多い。ポスターの設置に関しては、時間が限られていたこともあったが、現場を綿密に調査し、狙いを持って設置するというわけにはいかなかった。その結果、違う場所に設置すればよかったという後悔は残った。また、やはり設置場所はとても重要であることを学んだ。さらに、ポスターの設置に関しては設置場所の方の理解を得て、活動に賛同していただくことが非常に重要であった。撮影やポスターの設置の過程で様々な依頼を各所に行ったが、理解が得られる場所は協力的だが、理解が得られない場所は活動が受け入れられなかった。自分たちの思いをしっかりと相手に伝えるということが非常に重要であると感じた。

②QRコードを活用したゲーム

RESASのデータを参考に抽出したポスターの設置場所について検討。身延町外の県内各所への交渉は県立大学の先生方にご協力いただく。

③動画グループ

作成した動画について県立大学の先生からコメントをいただく。また、作成した動画をどのように公開していくかを検討。YouTube等の動画サイトに投稿することは簡単だが、身延町あるいは身延町の観光マップや観光ガイドのPRであることが本来の趣旨であり、身延町のホームページとリンクするのが一番理想的である。また、身延町ですでに作成してある「みのぶでできる100のこと」等のウェブコンテンツと比較してご覧いただくと両者にとって効果があるのではないかと感じる。身延町のホームページに載せていただくのが一番である。今後身延町と交渉していく。





4 総括

(1) 今年度の成果

本事業の目的は、地方にあっても深く思索する力を有し、発想が豊かで物事を建設的に組み立て課題を解決できるような地域の次世代を担う人材を育成することである。そのために、様々な活動を通してそのような人材に必要な力である自ら課題を発見し調査・研究することができる力、他者と協議し進むべき方向を考えることができる力、自らの考えをまとめて周囲に向けて発表できる力を育てていかなければならない。

今年度の本事業のテーマは、「昨年度の政策提言の具現化」である。身延高校の高大連携事業では、これまで地元身延町の超少子高齢化に伴う人口減少によって、将来的に町の存続さえ危ぶまれるという極めて厳しい現状を踏まえ、それに対してこの地域で学ぶ高校生として何ができるかというところからスタートした。その理念から昨年度身延町へ政策提言し、それが実際に反映されることとなった。その過程でのフィールドワークを通して身延町の現状を知り、身延町に何が必要なのかを考え、解決策に必要な知識・技術を習得し、それをどこに適応できるのかを考え、実際に提言として自分たちの言葉でまとめ身延町へ提案した。そうした活動を通して上記の本事業の狙いとする様々な力が育成されたのではないかと思う。

前半は、昨年度の政策提言とそれが反映された身延町の政策について見直し、そこから具体策を考えた。昨年度の振り返りを通して、生徒たちは自分たちの達成した成果の大きさを感じそれを誇りに思うとともに、活動の一つ一つを振り返る中でそれぞれ考えたことや感じたことを振り返った。当時は目の前のことに必死だったが、今思い返してみると至らなかったところやもっと工夫できたところなど課題点が見えてきた。それは生徒たちが一年間の活動を通して知識が増え、視野が広がったことによるものであろう。また、日々の授業や部活動から離れ、新しい自分を発見することができた。そこでは、学習を中心とする限られた活動の中での優劣から離れ、生徒各々の持つ様々な得意不得意をお互いが認め合う中で、それぞれが得意分野を発揮し協力して活動に臨む姿が見られた。彼らの人間関係も大きく変わったことと思う。

また、政策提言の中で掲げた提案について具体案を考える過程では、身延町内あるいは自

分の地元のことも参考に調べる中で、地域への理解も深まった。そしてさらに提案の具体案を考える過程では、今までとは違った視点で周囲を見ることが可能になり多角的なものの見方について実体験を通して気づくことができたのではないかと思う。また、アイデアの発想法について各自が思いを巡らすことができたのではないかと思う。これまでは思い付きやひらめきを頼りに考えていることが多かった。それももちろん大事だが、誰かに相談してみたり、互いの良い点や悪い点を指摘し合ってみたり、あるいは各地の事例を調べ、身延町に応用できないかと模索してみるなど、アイデアの出し方にも工夫が見られた。今後は、様々なアイデアをいくつかの視点で整理してまとめる工程を経て、最適な選択をするといった過程を踏めるとさらに良いと感じられた。

前半は、総じてアイデアを膨らませるという過程であった。生徒たちは自分たちで思い思いにアイデアを膨らませ活動を楽しんでいるようだった。全校生徒にアンケートを取るといった自分では経験のない活動をできたのも良い経験であった。一方で、ただ漠然と考えるというところからまだ抜け出せていない。アイデアを膨らませ具体案に落とし込むための技術をもっと磨いていかなければならないと感じた。

後半は、アイデアを形にしていく過程である。制作の過程では予想外の困難に何度も直面したが、その度にどのように解決するかを考え自分たちの目指した理想により近づけようと努力した。ゲーム班とおみくじ班に関しては、ポスターのデザイン一つとってもターゲットは誰なのか、どこに配置するのか、いつ配置するのかなどただ眼を引くだけの奇抜なデザインを考えるだけでなく、身延の活性化につながるようなデザイン作りができた。また、見た人が身延町に興味を持って、ともすれば身延町に来るきっかけになるようなポスターにするためにはデザインももちろんだが、載せる言葉の内容、フォント、配置、方言などいろいろな工夫の仕方があるのだということを学び、狙いのあるポスター作りができた。また、配置の検討段階では、県立大学の先生からの提案により地域経済分析システムRESASを活用した。初めは高校生には少し難しいかとも感じたが、RESASの操作性の良さも相まって生徒は様々なグラフやデータを参考にポスターの配置を考えていた。また、設置後にはゲーム、おみくじそれぞれのウェブページへのアクセス状況を見て、ポスターの内容や配置について多くの反省を得ることができたこともまた大変勉強になった。今年度は、なんとなく使用したレベルを脱しなかったが、マーケティングやデータ分析といったより高度な分野への広がりも見せたという点では非常に意義深いものであった。

また、動画班については、はじめは、思い付きの動画をただ撮影するにすぎなかったが、県立大学の先生方のご助言もあり、狙いを絞った、構成にこだわった動画の作成づくりができた。身延饅頭の撮影では、4つの製造販売業者それぞれと交渉したが、いろいろなところにロケに出向き自分たちで交渉し撮影し編集しと動画作成までの様々な工程を実際に行うことで動画撮影への理解が深まると共に、地域の方々とかかわる中で身延町のことを肌で感じ地域への愛着がより深まったのではないかと思う。こうした、地域への思いが地域の活性化を行う上では原動力となる。

(2) 参加生徒の感想

全体としては、この事業に参加して良かったと感じている生徒がほとんどだった。年間の活動を通じて様々なことを学ぶことができたためである。自ら考え行動する力が身についた、パワーポイントの発表を通じてプレゼンテーションスキルが向上した、動画の編集を通じてコンピュータや関連するソフトのスキルが高まった、動画の撮影を通じて、事前の計画やアイデア出し、構成の検討、配役決め、撮影場所との交渉、現地での下準備、カメラワークなど撮影の過程を学ぶことができた、RE S A Sの活用を通して、データの有用性やデータ分析の手法を学ぶことができた、またその面白さに気が付いた、身延町の魅力を再発見した、また身延町にはまだ自分が知らない魅力が多くあることに気が付いた、など多くの気づきや学びがあった。一方で、反省点や今後の課題も多くあった。反省点としては、勉強や部活動との両立がうまくできなかった、リーダーシップをとってグループをまとめることができなかった、積極的に意見を言ったり質問することができなかった、年度初めは消極的だった、活動を計画的に進めることができなかった、はじめの動き出しが遅く、後になって焦ることが多かった、自分のことに一生懸命になってしまい周囲に気を配って協力することができなかった、考えがまとまらず妥協してしまい内容を突き詰めることができなかった、人前で話すのが苦手なので発表を積極的にしなかった。自分のやりたいことを最後まで押し通せなかった。また、課題点としては、計画的に活動していきたい、アイデアの出し方がわからない、勉強と部活が忙しくて高大連携事業に時間が割けない、動画の編集は作業が難しすぎる、大学の先生と話す時間が限られている、などである。

「自ら考え、自ら行動することのできる次世代の地域を担う人材の育成」を掲げ、創造的な活動を生徒主体で行っていくことで、今年度の生徒の中で大きな変化があった。来年度以降もこうしたスタンスでの活動の継続が望ましいと思われる。一方で、生徒の活動時間の確保については、この事業の当初からの大きな課題である。高校内の話ではあるが、この事業に参加する生徒が、学校内の他の活動に縛られることなく本事業に集中できるような体制作りが急務であると感じた。今年度は、専属の分掌が発足し、月一回の講座以外にも自主的に集まり活動をする時間を多く設けた。その結果、生徒の本事業への興味関心が高まった。活動時間が増え、本事業に対する思い入れが深まることで、活動の質も向上する。来年度は、本事業の組織化がさらに進むことが必要であると考ええる。

末筆ながら、今年度本事業にご協力いただいた県立大学地域交流センター長二戸麻砂彦教授をはじめ、兼清慎一先生、吉田均先生に心から謝意を申し上げたい。生徒のみでなく、本校職員も事業の進め方や講座の手法のなど様々な点で大いに勉強になった。また、新しい学校づくり推進室の小林俊一郎さん、矢ノ下健司さんには大学とのコーディネート及び講座の運営をご支援いただいた。併せて御礼申し上げたい。

第3章 大学側からみた山梨県立大学との連携講座の成果と課題

大学側から見た成果と課題について、このプロジェクトのうち映像に関して指導を行った兼清准教授の報告を紹介する。

兼清准教授の報告

今回は、短期間に取材、撮影を行いながら、ポスターデザイン・制作、WEBデザイン・制作、動画制作を同時に進めるという非常に密度の濃いプロジェクトであった。事実上、秋以降の集中的な作業で、これだけの成果を得られたのは何より生徒自身の努力と意欲の賜物である。また高校側教員の並々ならぬ尽力もあった。メディアの制作に関するプロジェクトで、これだけ多様な制作活動を同時に進めるというのは授業のプロジェクトでは異例のことである。すべての高大連携授業で同じような成果を得られる保証はない。このプロジェクトの成否は、高校側の努力と意欲にかかっていることを改めて認識した。

昨年度プロジェクトの成果も大きな支えとなった。昨年度の高大連携授業の成果が身延町に評価され、プロジェクトの財源があったことからメディア制作が可能になった。さらには昨年度プロジェクトに関わった吉田均教授が RESAS の活用を提案して下さるなど、幅広い協力体制が構築されていた。高大連携授業はこうした協力体制の構築が重要である。

テレビ会議システムの活用については、他の業務の都合で現地に赴く時間がないときでも授業を行うことができるなど、遠隔地で授業を行う場合に障害となり得る移動時間の確保をクリアする一つの手法として有効と考える。一方で、今年度はメディア制作のプロジェクトとなったため、直接、講義（実習）に出向く機会が多かった。

今年度は、一部の時間を除き、本学の学生が関与しなかった。身延高校へのアクセスの問題とメディア制作というプロジェクトの性質によるものである。大学側教員と高校側教員がいる中での学生の役割は難しい。双方の教員への遠慮が生じることに加え、生徒の考えも尊重しなければならない。また学生への配慮が双方の教員にとっての負担になる可能性もある。高大連携授業に学生の関与を促すのであれば、最終的な成果の質にはこだわらず、生徒と学生の自主性を重んじる形でプロジェクトを形成する必要がある。

プロジェクト型の授業は成果にこだわる点が有意義である。一方で、プロジェクトの内容によっては参加できる教員に限りがある。高大連携を持続的に発展するためには、大学側の多様な教員の協力が欠かせない。大学側教員の専門分野と生徒の要望をすり合わせる機会を用意する必要がある。

第4章 まとめ

個別の年度のまとめは昨年度及び一昨年度の報告書に譲り、ここでは3年間を通した成果と課題について触れることとしたい。

まず、成果として、大学と高校が協働して高校生に対し授業を行うこと、その際に地域振興をテーマとすることは、高校生の成長にとって非常に有益であり、かつ、そのような授業は一過性のものではなく持続可能性のあるものであることが確認できた。

参加した生徒の人間的な成長は著しく、授業当初は発言に消極的だった者も回数を重ねるに連れて、自分の意見に自信を持って発言ができるようになる等、高校側の担当教員も驚くような主体性を発揮する場面を数多く見ることができたことは、予想以上でもあった。

また、連携授業の成果としても、高校生による平成27年度の身延町への政策提言や今年度のゲーム、おみくじ、動画といった成果物、広報結果の分析内容等は、大学生による取り組みと遜色ないレベルである。更には、町による本連携事業への補助金支出、高校生が提案した政策の採択という、高校生を中心として具体的な地域振興に関するプロジェクトが動き始めたことは、他のどこにもない画期的な成果と言えるのではないかと。

ただ、課題についても述べておきたい。

まず指摘しておきたいのは、これを実施する教員の負担は相当量にのぼる点である。大学側教員には授業への準備、高校側教員には事前の生徒への指導を行う必要があるが、内容をより充実したものにしよとすればする程負担が増える。幸いにして3年間の本研究に協力してくれた教員の熱意によりこの課題は乗り越えることができたが、今後の授業の実施にあたっては、担当教員の校務の軽減や人事上の評価等負担を軽減し担当者にも利のある配慮を講ずる必要がある。

関連して、生徒の負担についても配慮が必要である。平成27年度に参加した生徒16名に対するアンケートでは、充実感、達成感を感じた反面、実に14名の生徒が授業への参加を大変かやや大変と表現した。生徒を成長させるには適切な一定の負荷をかけることが必要ではあるが、生徒がその負荷が過大と感じてしまうと本来の興味・関心を却って削いでしまう。生徒が取り組む課題の量に配慮するとともに、教員、とりわけ大学教員が生徒に寄り添う姿勢を見せ続ける必要性を強く感じる。

また、連携授業を行う際には、例えば地域振興をテーマとするとしても、何をもって地域振興を考えるか、その切り口を複数案準備し柔軟に対応することができるようにすることも必要である。教員側も日頃から日本の各地における地域振興に向けた取り組みについて情報収集を図ることが望ましい。

今までの取り組みの集大成として、山梨県立大学と県立身延高等学校との間で正式な高大連携協定を締結するに至った。3年の期間新たに取り組みを行い、双方がその成果を評価すれば更に継続するとの内容である。同じ内容の協定を県立甲府城西高校とも締結し、来年度以降は2校で同様の事業を実施することになる。これらでの取り組みが生徒の

成長を促し、学校全体としてのレベルアップにつながると共に、学校と地域との繋がり、相互理解が進むような好循環になることを願ってやまない。

最後に、お忙しい中、本研究で熱心なご指導、数々の有益な助言をいただいた国際政策学部の二戸先生、吉田先生、二宮先生、張先生、八代先生、兼清先生、県立身延高等学校の仙洞田前校長先生、若林校長先生、深沢前教頭先生、笠井教頭先生、近藤先生、五味先生、橋本先生、石川先生、山上先生、身延高校生徒の皆さん、県立大国際政策学部の佐野さん、その他ご協力をいただいた全ての方々にこの場を借りて心より感謝申し上げます。

付記：本報告書の取りまとめにあたっては、山梨県教育庁新しい学校づくり推進室の小林俊一郎主幹および矢ノ下健司主査に、お手数をおかけしました。ここに、感謝の意を表します。（県立大学／二戸麻砂彦）